

22日から阿部貞夫生誕100年記念版画展

きびしい北国の自然と 風土を詩情ゆたかに描いた 阿部版画の世界



彫る／彫る／ぼくの心を彫る
この言葉そのままに木版画を彫り続けて、詩情豊かな「阿部版画」の世界を創った郷土の版画家、故阿部貞夫は今年生誕100年を迎えます。この記念すべき年に因んで、阿部貞夫の版画作品を市民に公開しようと、この度の記念版画展では、留萌市所蔵の作品の他、北海道立近代美術館所蔵のもの、個人所蔵のものなど、阿部貞夫が精魂傾けて彫り上げた全作品に相当する134点を一堂に集め展示するという画期的なものです。

阿部版画の世界は詩情に満ち溢れながら、厳しい北国の自然と風物を繊細に大胆に描いて観るものを引きつけてやまないものがあります。まずは本紙上で代表作の片鱗に触れていただき、9月22日からの記念版画展へのお誘いといたします。ぜひ北方の詩情豊かな自然と風物の作品群に心を委ね、ひと時をお過ごしいただきたいと思えます。

プロフィール

阿部貞夫は明治43年に東京の日本橋に生まれ、その年に留萌の祖父の元に身を寄せました。旧制留萌中学校の第1回生（昭和4年卒）で、いわば今日の留萌高校の礎を作った世代であります。同期生にはすでに故人となられた原田栄一（元市長）、松橋英三（俳人）などの著名人が名を連ねていますが、中でも阿部貞夫は意気軒昂、明朗闊達な少年であったようで、美術部長の傍ら弁論部に属し、応援団長を務めるなど青春を謳歌していたようです。

卒業後上京して本郷洋画研究所に入り、その後看板業を営みますが終戦で妻の美緒さんを帯同して帰郷することにしました。

阿部貞夫の苦闘の道はここから始まったわけで、やがて知人の丹葉節郎（当時釧路公民館長）を頼って釧路に行き、丹葉さんの支援を受けて版画制作に打ち込みます。

そして1958年（昭和33年）米国のセントジエームス聖公会の「現代日本版画展」に出品、入選を果たしました。

その後活動の拠点を札幌に移し、作品を創り続けて国内の美術展に次々と出品、入選を勝ち得ていき、日本版画協会などの日本有数の会派の会員に推挙されていきました。

1969年（昭和44年）4月、留萌高校の開校記念日に招かれ「独り立つ精神」と題する講演を行います。阿部貞夫の語り口豊かな熱弁は生徒の心を揺さぶり、満場は感動の坩堝と化した、と未だに語り継がれています。しかしその3カ月後の7月、心筋梗塞のため急逝しました。享年59歳。

紙上ギャラリー



いまはまぼろしの魚となったが西海岸で豊漁の頃は壮観であった。梓船にしんを追い込む「網起し」は豪快だが、梓船から鯨を汲み上げる汲船の風情は感動のクライマックスである。やん衆の唄うそうらん節の大合唱に銀鱗踊る。まさに命を燃やす感動のシーンであった。この作は、貴重な風俗画になってしまった。（自作メモから）

鯨沖揚 1962年



下 曳 1967年



黄金岬の夕照 1966年



初冬の港 1966年

一時間400トンの積荷能力があるという石炭ローダーは15米、トランスポーターは30米の高さがある。スケッチするにはヘリコプター以外にない、仕方がないので、青写真の平面図でこの絵を作った。赤い施設を活かすために僕はグレーと白の初冬の港にした。(自作メモから)



樹と人 1957年

版画家になったと思ったら病魔におかされて倒れてしまった。死の床で生きる願いを傾けた、その時このイメージが生まれた。床の中で桂の板に彫った。斗病の力になった。3月に倒れて、11月に第1回の個展を開いた。僕は病に勝った。(自作メモから)



新雪の幣舞橋 1962年



北方の樹群 1968年

留萌市芸術劇場助成事業 **阿部貞夫生誕100年記念版画展のお知らせ**

■版画展「いのちの波動」

日時 平成22年 9月22日(水)～28日(火) 午前9時～午後7時
(最終日28日のみ午後4時まで)
会場 留萌市中央公民館 ホール

■特別講演会「阿部貞夫の位置—創作版画と風土の発見」

北海道立近代美術館 浅川 泰氏

日時 平成22年 9月22日(水) 午前11時
会場 留萌市中央公民館 研修会議室1号

版画展・講演会とも
入場無料

■阿部貞夫版画集の刊行

お問い合わせ・連絡先
阿部貞夫生誕100年記念版画展事務局
〒077-0044 留萌市錦町4丁目1-15 TEL43-5268 FAX56-4645

記事に関するお問い合わせは 市教育委員会 生涯学習課 ☎42-0435



海門 1962年



トドワラの花 1963年